



『煌夜祭』特別書き下ろし短篇

「人であれ」

多崎 礼



彼女はノラと呼ばれていた。

母は娼婦だった。屋根裏部屋からスオウ家の祭列を見下ろし、輿に乗った島主を指さし「あれがお前の父親だよ」と吐き捨てた。

十歳の時、始めて客を取らされた。最初は嫌だったが、そのうち何も感じなくなった。十三歳の時、ノラは母を襲って食べた。冬至の夜のことだった。

母がいなくなってもノラは困らなかつた。翌日にはいつも通り夜の町に立った。白い肌
に黒い髪、望月のような美貌。客はすぐにみつかった。

板張りの床に押し倒された時、ノラは再び衝動にかられた。気づいた時には彼を殺して
食べていた。

ノラは思った。私は魔物になったんだ。だからこんなにお腹が空くんだ。

その後も彼女は街角に立ち、男を瞬に誘いこんだ。衝動のままに何人もの男を食べた。
失踪事件が相次いで犯人捜しが始まった。ノラは故郷の町を捨て、知らない町を渡り歩い
た。怪しまれるたび住処を変えた。獲物には困らなかつた。だが食べても食べても飢えは
満たされなかつた。

数年後。冬至の前夜、ノラは街角で若い語り部を見かけた。その狼の仮面と瑞々しい肌
を見て、急に腹が減ってきた。

「狼さん、泊まる場所がないなら私の家にいらっしやいよ」

「ありがとうございます」

まんまと語り部は誘いに乗った。

彼を家に招き入れ、その背に襲いかかろうとした瞬間、語り部は振り返り、ノラの胸に
銀の刃を突き立てた。

気づくと森の中にいた。目の前に焚き火があり、炎の向こうに狼の仮面をつけた語り部
が座っている。

ノラは彼に飛びかかろうとしたが、身体が動かなかつた。罵声を浴びせようとしたが、
声も出なかつた。

語り部は彼女に尋ねた。

「貴方はなぜ人間を襲うの？」

ノラは答えた。

「腹が減ってたまらないからだ」

「なぜそんなにお腹が減るの？」

「私が魔物だからだ」

「魔物が人を食べたくなるのは冬至の夜だけだよ」

「だが腹が減るんだ。満たされないんだ」

「満たされないのは欲しているものが得られないから。貴方はずっと誰かに愛されたかったんだよ」

「馬鹿馬鹿しい！」

ノラは背をのけぞらせて哄笑した。

「私は幾人もの男に愛してると言わしめた。何人もの男にお前が欲しいと言わしめてきた！」

「貴方が欲したのは性愛ではなく無償の愛。でも懇願は無視された。祈りは誰にも届かなかった。絶望した貴方は実母を殺し、その肉を喰らい、自分は魔物だと思い込んだ」

「愚弄するな！」

彼女は怒りに牙を剥く。

「私は魔物だ！ 正真正銘、本物の魔物だ！」

「いいや貴方は人間だ。人であることを放棄した人間だ」

淡々と語る彼を見て、不意にノラは怖くなる。

狼の仮面——狼はスオウ家の紋章だ。

「お前は、まさか……」

「ずっと貴方を探していた。やっと見つけた。ようやく出会えた。でも——遅すぎた」

悔しそうに呟いて、語り部は仮面を外した。

白磁の肌に蒼穹の瞳。幼き頃、遠くに垣間見たスオウ島主によく似た顔立ち。

青く光る目でノラを見つめ、その青年は静かに告げる。

「厄災が迫った時、島主の血筋に魔物が生まれる。厄災とは貴方のこと。僕は貴方を止めるために生まれたんだ」

「私を止める？」

ノラは笑おうとしたが、漏れたのは低い嗚咽だけだった。

「貴方はもう偽れない」

陰鬱な声で彼はささやく。

「ここは僕の腹の中だから」

それを聞いて、ノラはようやく理解する。私は魔物ではなかったのだ。しかし彼は本物で、私は彼に食べられてしまったのだ。

ああ、なんて虚しい人生だろう。どうしてこんなことになったのだろう。いったい何がいけなかったのだろう。

理由を求め、魂が記憶の坂を転がり落ちる。心と身体が時を遡っていく。頑まない幼子に戻り、ノラは嵐のように泣きじゃくった。

「なぜ父さんは私を迎えに来てくれないの？ なぜ母さんは私を叩くの？ 私が穢れた子だ

から？私が悪い子だから？」

「穢れてなんかいない。君は何も悪くない」

「貴方はだれ？」

「僕は君の悲しみを食べる魔物」

泣き笑いの表情で彼はノラを抱きしめる。

「怒りや憎しみ、君を苦しめるものすべて僕が食べるよ。君が犯した過ち、許されざる罪も全部僕が食べるよ。だからノラ、もう泣かないで。さあ、目を閉じて。ゆっくりとおやすみ」

言われるままにノラはさらに小さくなる。無垢な赤子になって青年の腕に抱かれる。無償の愛に包まれ、安心して目を閉じる。

煌夜祭の翌日、ノラを喰った魔物は町を離れた。ノラが殺した男達の家族を探し出し、訪ねては謝罪を繰り返した。

あれから四十年……

狼は今も贖罪の旅を続けている。

この話を仕入れたのは今年の春。

狼が私を訪ねてきたんだ。開口一番、彼は言ったよ。

「私は貴方の兄を食べました」って。

こっちは兄のことなんか名前も覚えちゃいないのに、彼は平伏して頭を下げた。もういいよと言っても泣きながら謝り続けた。だから言ってやったんだ。許してやるからお前の旅の理由を話せって。

聞き終えて思ったよ。

私達は太陽の下を歩けない者達を『魔物』と呼ぶが、それは大きな間違いだと。

身体の造りが変わっても、彼らには人の心がある。十二分に物語を喰えば人を喰らうこともない。

真に魔物と呼ぶべきは、心を失くした人間だ。孤独や困窮、先が見えない絶望が人を魔物に変えるんだ。薄暗いこの世の中、何があってもおかしくない。お前も私も例外じゃない。誰だって魔物になり得るんだ。

だからこそ夢が要る。未来を照らす光が要る。希望に満ちた物語と、それを伝える語り部が要る。

語り続けろ。伝え続けろ。暗くても寒くても口を閉ざすな。長い長い冬至の夜がこうし

て明けていくように、どんな暗闇もいずれ過ぎ去る。
絶望に抗え。心を失くすな。
魔物になるな。

人であれ。

